

金価値と金価格の動向とその理論についての考察

——最近のドイツにおける研究動向を参考にして——

松 本 朗

I. はじめに（問題の所在）

変動相場制移行以降、国際通貨制度の世界では「金廃貨」が決定的に進んだように見える。この結果、経済理論の世界においても、金は石油などと変わらない資源（商品）として取り扱われるようになり、外貨準備における金の位置づけも資産選択理論の枠組みの中でとらえられるようになってきたといえる。これに拍車をかけたのが、90年代以降の物価の低下傾向（我が国ではデフレが顕著に進行している）と2000年以降の金価格の急騰であろう。物価の顕著な下落によってインフレーションが問題にされなくなり、通貨の減価の度合いを検討する必要がなくなった。さらに、金価格が通常の理論では説明できないほどに急騰したことによって貨幣論の次元から金問題にアプローチする試みが少なくなったといえる。

ここにおいて次のような問題が提起される。

「今日、さまざまな紙幣（たとえば、ドル、ユーロ、ペソ、円）と、諸商品のあいだには、どのような関係が存在しているのだろうか？¹⁾」。

この問題提起に対して周知のように、金と通貨（紙幣や信用貨幣）との間の関係を全く認めない論者＝金廃貨論と金と通貨との間の関係を一定認める論者に大きく議論が分かれてきた。筆者は先行論文においてすでにこのうちのいくつかを取り上げ、その主張の特徴を整理した。²⁾筆者の整理によれば、金廃貨論の特徴は貨幣の価値尺度機能を否定するところにある。また、金の貨幣性を認めながら今日の通貨＝紙幣とする論者も、最終的には、金と通貨との関係を観念的な関係へと封じ込めてしまい、金廃貨論へと結びついていく。³⁾

一方、公的な意味での通貨と金との関係が断ち切られた現実について、国家に委ねられていた通貨と金とを結びつける義務が市場の活動に委ねられたに過ぎない事態として捉え、現代における金の貨幣性を今日でも認める論者もいる。⁴⁾また、諸外国に目を向ければデビット・ハーベイのように、

「……貨幣と社会的必要労働時間との関係性は、金の場合でさえ問題をはらんでいたが、それよりはるかに間接的にわかりにくくなっている。しかし、関係性が隠されており間接的でわかり

にくいことは、それが存在しないということではない。国際通貨市場の混乱は、さまざまな国民経済の物質的生産性の格差と関係している。マルクスが概略している、現存する貨幣形態と商品価値との問題含みの関係性は今日でもまだ残っており、その現代的な現象形態はまったく異なったものになっているとはいえ、マルクスが先駆的に切り開いた分析の基本線は大いに有効である⁵⁾」

と主張し、今日でも金が貨幣であることの意義を強調する論者もいる。

このように金の貨幣性を認めるとすると、ここで一つの課題が投げかけられる。それは、今日における金と通貨との結びつきがどのようになっているかを論証しなければならないという課題である。この課題に対して、ドイツにおいて金＝貨幣性を認めながら現代金融問題に迫る研究が以前から続けられてきた。例えば、西ドイツのマルクス学派の研究グループで雑誌‘Sozialismus’を刊行している SOST (Sozialistische Studiengruppen) は、1979年に *Gold, Preise, Inflation* (VSA-Verlag, Hamburg, Germany) を発表し、マルクス貨幣論の立場に立ちながら、金価値の問題とインフレーション、物価の問題を理論的・実証的に解明することを試みた。

本論文では、SOST のメンバーの一人であると考えられる Stephan Krüger に注目する。Krüger は、SOST と共著を発表すると共に、『資本蓄積、景気循環、長期的変化の傾向についての一般理論』(*Allgemeine Theorie der Kapitalakkumulation, Konjunkturzyklus und langfristige Entwicklungstendenzen*, VSA-Verlag, Hamburg, 2010) などの単著をまとめている。この彼が近年、『貨幣の経済学』(*Politisch Ökonomie, des Geldes — Gold, Währung, Zentralbankpolitik und Preise*, VAS-Verlag, 2012) を上梓した。この著書では、きわめて体系的に貨幣論が展開されているのと同時に、現代的な金融問題へと分析の歩みが進められているところに特徴がある。本著書の中で Krüger は、金問題に対しても積極的な分析を行っており、興味深い。本論文では本書における金研究について紹介し、その積極面を取り込みつつ、我々の独自な見解を展開しようとする試みである。

II. Krüger 現代における金の貨幣性をどのように捉えるか

それでは Stephan Krüger は通貨と金との関係をどのように捉えているのであろうか。彼は、通貨制度の歴史的な展開の中で金と通貨との結びつきが希薄になり、「貨幣の質的、量的な金からの離脱」、つまり「貨幣商品としての金の広範な観念化」が進むことを認める。このことが、際限なく貨幣名の変更（価格標準の切り下げ）をもたらす根拠であるという。つまり、金と通貨との結びつきの現象的な観念化が進むことで、価格標準の「終わりなき変更」(*eingewissemaßen* 《loses Ende》 dieser Denomination) が行われているとする (*Politische Ökonomie des Geldes*, S. 136)。

しかし、彼の議論の特徴は、「観念化」と「金廃貨」で展開を止めないところにある。つまり、貨幣金の際限のない観念化が表面上金の廃貨を促すものの、逆に、そのことが価値実体としての貨幣商品金への回帰を促すと主張するのである。

「……これら『終わりなき結末』は完全な金の廃貨とは異なり、重要な一般的等価物と相変わ

らず関連している。それゆえに、資本主義の世界市場関係内部における、そして、世界市場関係で表れている資本主義的蓄積恐慌の内部における危機によって、不換代表貨幣通貨が再び強制的に本来の貨幣名変更の根拠としての金に結びつけられようとし続けている。これらは、マルクス以降、資本主義的生産関係の支配のもとで原則的に排除されることのできない、信用の激変—すなわち貨幣制度における激変と同義であろう。それだからこそ、貨幣商品の性格が体系の第一の規定であるということにとどまっているだけではなく、金の価値展開があいかわらず貨幣理論の対象であることを示している⁶⁾」。

現象的な貨幣金の観念化、つまり価格標準が際限なく切り下がる事態にこそ、むしろ通貨の背後に貨幣金が存在していることを示すことに他ならないというわけである。したがって、彼自身、われわれが従来から認めてきた「事実上の価格標準」の存在を認める⁷⁾。そうすると次に問題になるのは、現実の貨幣金と商品との結びつきをどのように理論的、実証的に捉えるかである。この問題への解答を求めて、金の価値規定の分析をしなければならない⁸⁾。

Ⅲ. 現代において、金価値はどのように捉えることができるのか。

1. 金の二重の運動

貨幣としての金の価値がこれまで問題にされてこなかったのは、次のような論理的前提を置くことで、価値-価格の問題を解くことができたからである。すなわち、a) 金は貨幣商品として世界貨幣の機能を果たしており、b) 金本位制を前提とすれば、兌換によって金と通貨が同一視できたこと。c) 価値の中位の法則を前提している限り、金価値を所与とすることができ、同時に、d) 貨幣の流通形態だけを問題にすれば、金価値を所与とすることができたからである⁹⁾。

しかし、現代社会では、金と通貨とは国内的には兌換が停止されている。また、国際的にも金は現象的には世界貨幣の一部の機能しか果たしていない（「観念化」の進行）。こうした条件下で、金は商品としての側面と、貨幣としての側面の二つの顔をもつことになる。そのような状況下でまず確認しておかなければならないのは、金の二重の運動が明確に現れることである。

マルクスがすでに指摘しているように、金は市場に現れるときに二重の運動を行う。

① 産金国→非産金国：第一に、金が産出される産金国で取引され、最終的には非産金国へと輸出される運動である。そして、産金国から非産金国へと供給された金は、蓄蔵貨幣として流通界にはいる。

② 非産金国←→非産金国：第二番目は、非産金国間同士の交換である¹⁰⁾。非産金国と非産金国の金流通は、産金国から非産金国に蓄蔵貨幣として流入した金=金資産の「永遠の再配分過程」として規定できる。

金価値の問題は、この二重の運動にしがって検討を加えなければならない。だからこそ、われわれもこの二つの運動の面から分析を試みてきた。こうした私たちのアプローチと同様に Krüger もこの二つの運動を認め、その二つの運動における金需要と金供給の両面から金価値・金価格の分析を進める。そこで以下では、私たちがこれまで行ってきた研究成果に Krüger の研

究の積極面を取り込みながら、金価値、金価格の問題を考えていきたい。

2. 産金国における金価値および金価格。

産金国において産出された金は現地通貨と交換され、それによって産金業者は商品を購入する（例えば、生産手段や労働力）。さらに、それらの商品を海外から輸入すれば、産金国と非産金国との間の金と商品との交換が行われることになる。つまり、国内及び海外の商品と金との交換比率が形成される。金が貨幣である限り、この交換比率は金によるその他の商品の価値表現となる。

「(貨幣) 金の商品とのより直接的な生産物交換は、新産金の価値と、貨幣と交換される商品の価値(生産価格)とが、交換価値として一度の行為で表現されることを意味する。商品にとってこのことは直接的に妥当する。商品は、一般的な等価物としての金と相対的な価値形態の地位で対立しており、いかほどのオンスの金による生産物価格がそれぞれの商品価値を表わす¹¹⁾」

その一方で、金の価値は交換される商品との交換比率の中に現れるのみである。

「逆に、貨幣の価値は、金と個々に交換される商品に対する関係でのみ、すなわち、全体の、あるいは展開された価値形態の形でのみ表現される¹²⁾」。

従って、貨幣としての金は貨幣量表示としての価格はもたない。貨幣としての金は、他の多くの商品との交換比率の変化の中でのみ、その価値変化を反映する。言い換えれば、金の価値変化は、商品と貨幣金との交換比率を直接に決定する産金国での商品および貨幣金の需給構造の中に現れる。そこで、産金国における需給構造とそこから読み取れる金価値の変化について考察していく。

なお、このように金価格は金の価値表現ではない。つまり、金価格の変化には金価値の変動は直接には反映されない。言い換えれば、理論的には、金価値と金価格は全く別のもととして捉えなければならない。しかし、Krügerには金価値と金価格との混同が多く見られる。そこでこうした限界を認めながら、以下では、Krügerの議論のなかでも積極的に取り入れることのできる点を紹介しつつ、金価値問題にアプローチを行うという手法をとる。同時に、Krügerへの必要な批判点は脚注で展開する。

2-1. 金の供給および需要サイドからみた金価値を規定する要因の考察¹³⁾

まず、供給サイドにおける金価値を規定する特徴は次の二点があげられる。

- a) 現実的に金生産は少数の産金国に集中され、その少数の金鉱山における生産条件が世界貨幣である金価値を左右する
- b) 戦後金鉱山の自然的生産性(単位グラムあたりの金含有量)は悪化している。少なくともこの10年間は自然的金生産性が上昇したことはない。したがって、この限りでは戦後の自然生産性の変化は、金価値を上昇させるように働いていることがわかる。

次に、需要サイドから金価値を規定する特徴を見てみよう。

- a) 信用貨幣の広がり(特に、2007年まで)によって、貨幣金需要は減少し、安定した(世界貨

幣の観念化)。特に、公的金需要に当てはまる。

- b) この世界貨幣の観念化は、金生産者に影響を与えなかった。
- c) 近年の金需要は、宝飾需要+投資資産需要（前者は景気循環に連動している。後者は浮動性（ボラティリイティ）が高い）。
- d) 上記のうち、投資資産需要（投機的需要）は無視できる。したがって、もっぱら宝飾需要だけが変動要因を規定している

このように金の需給構造における特徴を捉えると金価値については次のような事が結論づけられる。

- a) 金の価値を分析する場合、ごく少数の金生産国における金生産条件を分析すれば良い。
- b) 自然生産性（一単位の鉱石に含まれる金含有量）から見て、戦後の金価値は上昇する傾向にある
- c) 金需要構造は全体として大きく変化していないため、需要サイドからの金価値変動を促すような構造的要因は少ない。

2-2. 非産金国←→非産金国の流通における金の価値規定の特徴

Krüger は、非産金国間で移動する金の価値について次のように考えていく。つまり、ある与えられた期間内の金生産と、既存金量からの金供給、すなわち、より以前の期間に生産された金の供給（たとえば、退職やリサイクル）との間の量的な関係に応じて、実際に規定される金の交換価値は、実際の社会的必要労働量から生み出される関係よりも、多少、かい離する。その結果は社会的再生産の「名目的な」条件のもとでの金の価値の恒常的な増加である。¹⁴⁾

このことから次のような興味深い結論が導き出される。金の価値が恒常的に増加するという事態によって、通常の状態を前提した時に、貨幣価値をほぼ一定の大きさとしてみなし、そして価格や為替相場への別の影響要因の分析に集中することができる。¹⁵⁾

以上、需要と供給の構造から金価値をめぐる議論の特徴を見てきた。ここで確認したいことは、少なくとも戦後の金生産と金需要の特徴を見る限り、金価値の変動はある程度上昇傾向を持っているということである。その限りでは、物価を押し下げる圧力がかかる要因があるといえる。その点で、金の交換価値すなわち商品と金との交換比率が逆に反映される戦後の世界の物価動向への金の価値変動の影響は少ないということができよう。つまり、この分析の限りで金の価値は長期的には安定しているという前提を置くことができる。そこで、こうしたことを前提に次章では、戦後の金価値および金価格の動向を見ていく。

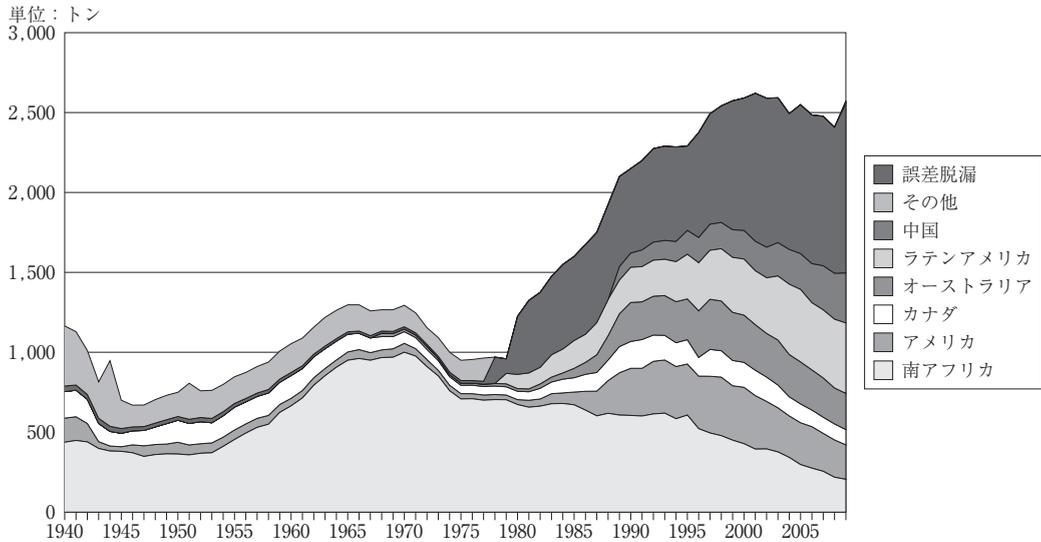
IV. 20世紀半ば以降の金価値と金価格の変動

戦後の金価値および金価格の動向とそれが示すインプリケーションを考えていく前に、まず、世界市場における金産出国のシェアの変化を概観していくことにする（図1および図2を参照）。

1. 世界市場における金産出国シェアの変化

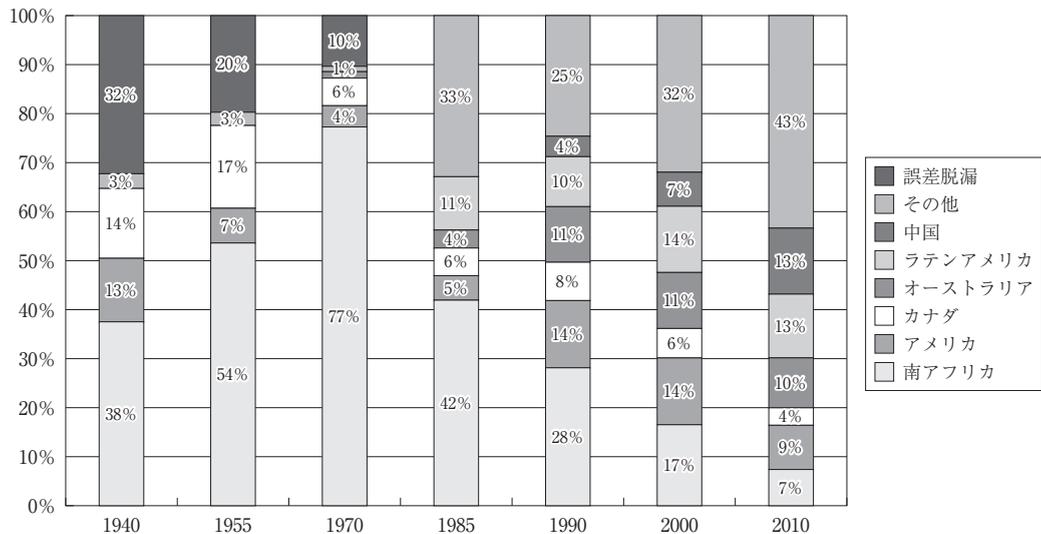
戦後から1970年代まで世界最大の産金国は南アフリカであった。南アフリカは1970年には世界

図1 国別の金算出量の変化



原資料：South Union Corporation Ltd, Bank of International Settlement, World Gold Council, www.Sharelynx.com

図2 国別金産出シェア



原資料：South Union Corporation Ltd, Bank of International Settlement, World Gold Council, www.Sharelynx.com, USGS GoldStatistics and Information (<http://minerals.usgs.gov/minerals/pubs/commodity/gold/>)

の産金シェアの77%をしめる状況であった。従って、前章でも述べたように、南アフリカで産出された金の価値が世界的な金価値を規定すると言っても過言ではない。

南アフリカの金生産シェアが顕著に凋落したのは、1970年代のピークを過ぎてからであった。ここには二つの要因が考えられる。一つは、戦後IMF固定相場制がニクソンショックによって崩壊し、通貨（特に、基軸通貨ドル）の実質的な代表金量とはかけ離れた固定の金平価が取り払われたことであり、二つ目は、南アフリカの黒人差別政策が撤廃され、黒人労働者の労働条件に変

化が現れことにある¹⁶⁾。

戦後 IMF 体制は金公定価格が維持されることが柱であった。しかし、その一方でアメリカはインフレーションを進行させ、ドルを世界中に垂れ流した。つまり、基軸通貨ドルの代表金量は傾向的に減少していたといえる。代表金量が減少しているにもかかわらず、以前と同じ平価水準で金価格が固定されていれば、価値的に見て金は他の商品に対して不利になる。つまり、金の他の商品との交換比率は金に対して不利になる。そのことは金生産の採算ベースの悪化につながるから、相当の優良金山ないし労働生産性の高い産金国のみが生き残る。後に見るように、南アフリカの金含有量は1970年代まで上昇をつづけ、同時に、アパルトヘルト政策による劣悪な労働条件から発生する超過利潤によって圧倒的な国際競争力を持っていた¹⁷⁾。これらの条件が南アフリカの世界の産金シェア77%という現実をつくり出したと言える。

一方、この二つの条件が崩れれば南アフリカの金生産における競争力は急速に減少し、他の国で金生産が開始される。1970年代以降の南アフリカのシェア減少の背景はこのようなものであったと言える。1980年代以降における金生産の特徴を指摘するとすれば、金生地の多様化の進行と言える。特に21世紀以降、この傾向が強くなる。2010年には、南アフリカのシェアは7%にまで下落し、代わって、中国、ラテンアメリカ、オーストラリア、アメリカなどが主要生産地として台頭してきている。とはいえ、圧倒的なものではなく、主要各国とも10%前後の分け合っているというところである。

このことは、世界市場における競争上の均等化がすすんでいる可能性を示唆している。そこで、以下ではそのことを前提に、戦後一貫して主要生産国であった南アフリカの金生産性の状況をもとに¹⁸⁾、金価値の動向について考察していきたい。

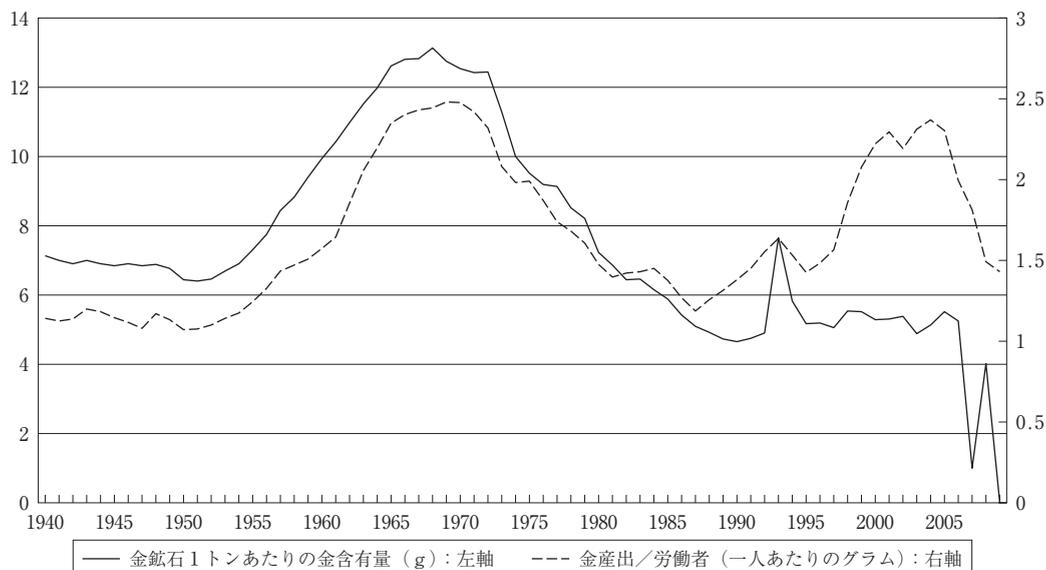
2. 南アフリカの金生産性と金価値の動向

初めに、南アフリカの金鉱山における1トン当たりの金含有量をみることで、自然的な生産性の変化を確認する。南アフリカでは、1960年代—1970年代で南アフリカでの新鉱山の開発はピークを打ち、その後新鉱山の開発は減速する。したがって、鉱石トン当たりの金の含有量は、1970年代のピークまで増加していく（図3参照）。この限りでは、1970年代までの自然的な要因から見れば金価値は減少していることがわかる。その一方で、1968年以降、金含有量は傾向的に減少し、2008年にはトン当たり4.01gまで減少した。これは1940年のトン当たり7.12gの約56.3%である。一時的ではあるが、2007年には0.97g（13.6%）まで減少している。つまり、長期的な自然的要因から見れば金価値は増加する方向にある¹⁹⁾。

次に、金鉱山における労働生産性（労働者一人あたりの金グラム、図3を参照）を見てみると、1940年—1950年代半ばの15年（戦後第一循環）の間は、金鉱山の労働生産性は安定していた。つまりその限りでは、金一単位あたりの価値は一定であったといえる。その後、戦後の第二循環の始まる1953年から上昇し始めた労働生産性は、1970年代（第五循環）初頭までに二倍以上に上昇する（1953年を100としたときに、1970では224.9）。したがって、この限りでは、金価値は半分以下に下落しているわけだから、商品物価に対する上昇圧力になったと考えられる。

1970年代初頭以降、金生産性は下落し、1987年に101.6にまで低落、1953年水準まで戻る。この時点の金価値変化は商品物価に対して上昇要因となっていると考えられる。その後、生産性は

図3 金生産における自然生産性と労働生産性



原資料：Transvaal and Orange Free State Chamber of Mines, Krüger による独自計算

反転し、2004年に2倍（1953年基準で202）まで上昇する。このことは、金価値を低落させたと考えられる。このときの生産性上昇の要因には、新産金における技術革新に加え、リサイクル金の増大や中央銀行の準備金放出が生産国への競争を促したことが考えられる。このことは金供給構造の変化にも現れている。1970年代以降金市場への供給量は増大しているが、その第一要因は新規金鉱山の開発である。そして、その他の供給要因としてリサイクル金の増大（年々の金供給1/4のまで増大）と中央銀行からの金放出の増大が観察されるのである。この結果、新産金の金供給に占めるシェアは全体の2/3以下になった。

さて、2004年以降金生産性は2009年に1953年の1.2倍（指数で121.8）に下落している。このように戦後、金の生産性は大きな上下動を行ったことがわかる。そして、この上下道の結果は、図3を見れば一見してわかるように、あるレンジに収まり1950年代水準に戻るのである。つまり、単位あたりの金生産への投下労働量の長期的傾向という視点から見ると、一単位の金の価値の歴史的傾向は一定のレンジに収まっていることがわかる。従って、長期的な金生産性変化の動向を観察すると、金価値はほぼ一定に収まっていると結論できる。

3. 戦後金価格の動向の考察

前節では、金の生産地における生産性動向をみることで金価値変化について考察してきた。本節では、金価格に目を向け検討する。まず、工業製品との関係で金の価格変動と金価値の変化との対応を見ていく。1970年代半ば以降、顕在化した過剰蓄積によって60年代の繁栄期に比べて蓄積速度は遅くなった。そのため、中心国の工業製品に新たに付加される労働の部分は減少した。その一方で、1970年代初頭以降、金の生産性は下落、つまり、金価値は上昇した。ということは、商品物価にたいしては下落圧力がかかるはずである。にもかかわらず、世界的な物価上昇は進行する。逆に、金生産性が反転上昇する1985年以降には、主要国物価上昇率が減速してしまう。こ

うした事態は、金の価値変化では説明できない。つまりこのことは、上記でも指摘し、先行研究でも明らかにされた、金価値の変化と金価格の変化との間に対応関係が無いことを改めて示している²⁰⁾と言える。

次に実際の金価格の動向に目を向けるが、ここでは産金国南アフリカにおける現地通貨ランド建ての金価格と国際的な金市場でのドル建て価格の動向を比較しながら検討していく。

最初に、産金国である南アフリカの金ランド価格の変動を見てみたい（図4を参照）。1950年代から1970年代までは、1オンス=25ランドの金価格が続き、金生産性の変化（金価値の変化）とは無関係に一定のまま維持されてきた。これは、同時期に金の公定価格（金ドル平価）が維持され、ドルとランドとの間に固定相場が維持されていたからに他ならない。つまり、事実上の価格標準の裏返しとしての金価格が国際的に維持されていたために、産金国でも一定の金取引価格が維持されたといえる。ところが、1972年以降、南アフリカにおける金の価格は急速に上昇し始め、その後一貫して上昇を続けている。南アフリカにおける金価格は、2010年末には9,424ランドになり、1950年代の約380倍まで騰貴していた。

第二に、ドル建ての国際的な金市場価格を見てみよう（図5参照）。すでにふれたように、1970年までは金公定価格が維持されていたため、金市場価格もほぼ一定のまま推移してきた。この点、産金国における動向と同様である。ドル価格は1970年前後から急速に上昇し、1980年に850ドルというピークを付けた後、2001年に255.95ドルまで下落し、その後再び上昇し、2011年に1896.5ドルに至っている。

さて、この両国の金価格の動向からどのようなインプリケーションが得られるであろう。ここで整理しておきたい。

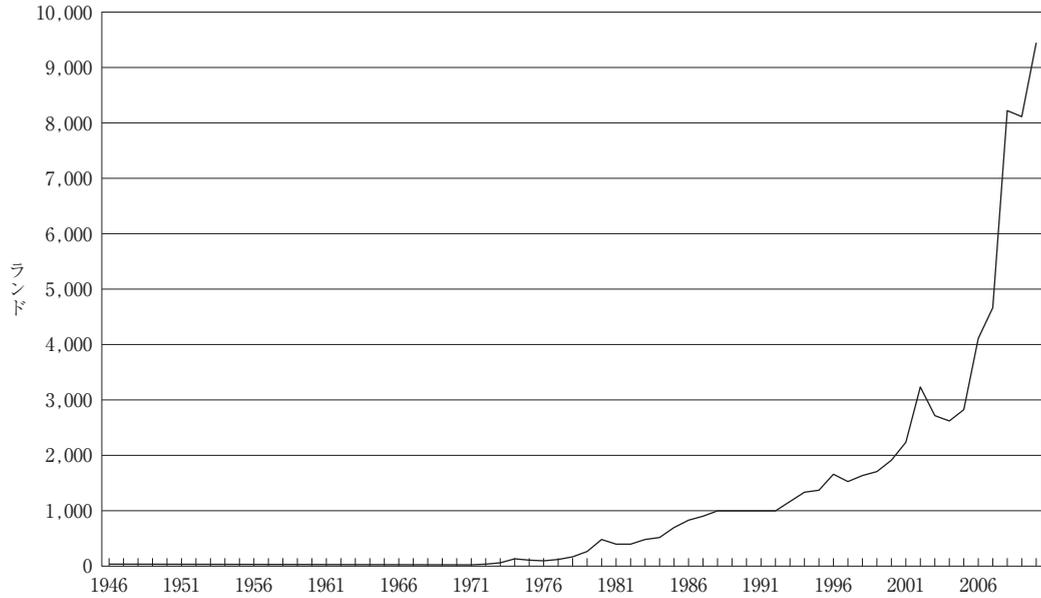
*まず、両国の金価格動向と前節でみた金生産性の変化を比較することによって理解できるように、金価値の変化と金価格の動向に相関関係は見られないということである。この点、金を貨幣とすれば、金価格が金の価値表現ではないという従来の研究成果が裏付けられる。

*それでは、この間の金価格は何を表現しているのだろうか。金は、「一方での国際商品としての役割を、そして他方での貨幣及び富の対象としての役割を自らの中に含み、そしてそれを表現²¹⁾」している。先行研究で明らかになっているように²²⁾、加工需要はリサイクル供給とほぼ量的に一定しており、需要のほとんどは富の対象ないし、蓄蔵貨幣で構成されているとみなすことができる。

蓄蔵貨幣ないし富の対象としての需要は、三つの程度の要因から形成されると考えられる。第一に、剰余価値の拡大および一般的な所得の拡大による蓄蔵貨幣ないし、富の対象への需要の増大、第二に、通貨に対する信用度合。通貨危機ないし経済危機が支払手段ないしは蓄蔵貨幣への需要を高める。第三に、金市場価格の上昇をあてにした投機的需要である。さらに、この需要は第二の需要と密接に関連している。ここからわかるように、金市場価格を決定する大きな要因は、蓄蔵貨幣ないし資産としての需要によって形成されるとみなせる。1970年代以降こうした需要において無視できないのが、資産に対する投機的需要である。特に、過剰貨幣資本の拡大がこの要因になっているといえる。

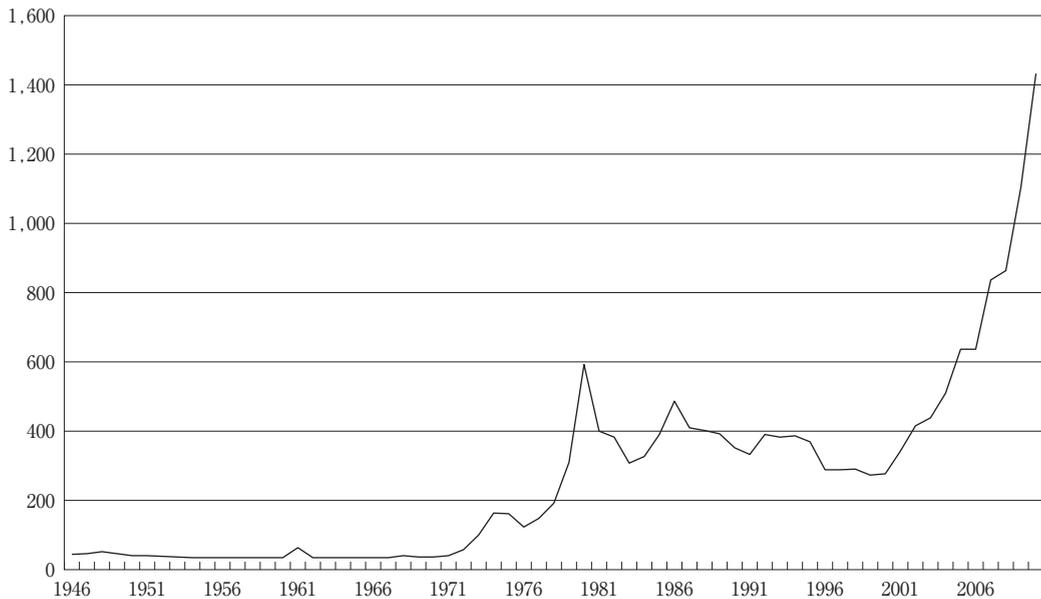
1980年代に国際的な金市場価格は810ドルの戦後最高値をつける。実は、この時の価格上昇は、南アフリカのランド価格の上昇を上回るものであった。南アフリカ・ランドと国際通貨ドルの信

図4 ランド建て金価格（ランド／ファインオンス）



原資料：South African Chamber of Mine, Piks Currency Yearbook, Gold-Report, World Gold Council, www. shrelynx. com

図5 金世界市場価格（ドル／ファインオンス）



原資料：London Bullion Market, Piks Currency Yearbook, Gold-Report, World Gold Council, www. shrelynx. com

認および両国の国力（国民的な生産力）を考えれば、この時に金ランド価格の上昇率を上回る金ドル価格の上昇が、国際的な投機的要因によって過大に押し上げられた結果であると結論できる。それだからこそ、2000年に向かって長期的な金ドル価格の調整局面が現れることになるのである。

2000年代に入ると、ドル金価格ばかりでなくランド金価格も同様の急騰を示している。この背

景には、投機的資金が国際的な金市場ばかりでなく、経済成長を続けている南アフリカにも流れ込んだ結果であることは、これもまた推測できるところである。

* 金価格が表現しているもう一つのファクターは、通貨の減価（インフレーションの進行）である。金価格は金一定量を計算単位（貨幣名）で表示しているものに他ならないから、その上昇は貨幣名の代表する金量の減少を意味する（事実上の価格標準の切り下げ）。したがって、金価格上昇の背景にはインフレーションの進行が考えられる。すでに、見たように南アフリカのランド建て金価格は1980年代初頭では、ドル価格の上昇を下回っていたが、その後急騰をつづけ、2010年には9,000ランドを超えた。一方、ドル建て金価格は80年代以降下落した後、2000年に入り反転上昇し、1,800ドルにまで達している。しかし、ランド価格とドル価格を比較すると、ドル建て金価格の上昇、つまり金1単位に対するドルの減価は、ランドのそれに対して小さい。1940-50年代を基準にすると、ランド金価格の上昇は380倍であるが、ドルのそれは43倍に過ぎない。この差の最も大きな要因の一つは、ドルとランドの事実上の代表金量の減少の差、つまりインフレの差で説明できるであろう。

V 通貨の対外価値という視点から見た金価格の意義

さて、Krüger は、中心国と周辺国との関係にある国際通貨制度を前提に、「通貨の対外価値」について言及している。

「唯一金で表示される本来の対外価値を持っている国際的な支配通貨に対して、それぞれの為替相場を経由して諸通貨の対外価値が媒介されるということは、貨幣商品の観念化に基づく国際通貨関係の一般規定であり、したがって、歴史的に存在していた過去の通貨制度とは決して直接には一致するものではない。／……関心の中心にある疑問は、何によって国々の代表貨幣通貨の対外価値は規定されるのか、すなわち、貨幣商品の価値尺度機能は、国々の代表貨幣の対外価値にどのように認められるのかである²³⁾」。

そして通貨の対外価値は次の三つの要因で規定されるとする。

1. 問題になっている世界市場での国民的労働の大きさの変化
2. 金価値の変化
3. 国内経済の貨幣流通から生じる、金と当該代表貨幣との間の代表関係の変化²⁴⁾

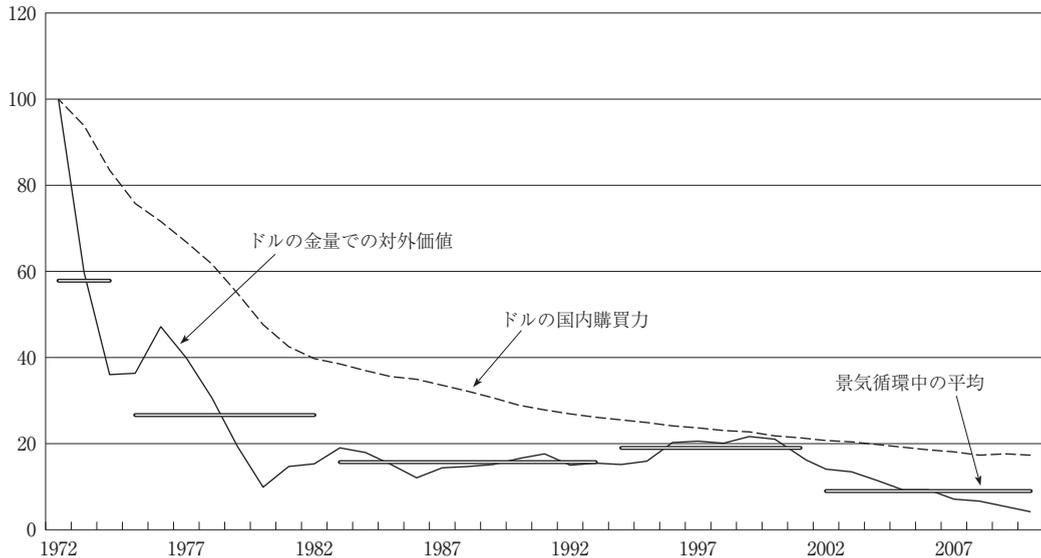
ここからわかるように、Krüger は、通貨の対外価値は為替相場変動に現れると指摘している。そして、その規定要因として1) 価値的要因（a: 金価値の変化, b: 国際価値の影響）と、2) 事実上の価格標準の変更を認めるのである。さらに、対外価値の変化がその通貨の対内価値（通貨の購買力）の変化をも引き起こすことを認めている。こうした理論的な示唆については、さらに検討が必要であるが、Krüger の金を軸にした対外価値と対内価値の分析には大変興味深いものがある。そこで、ここではドルの対内価値と対外価値の差についての Krüger の分析にもとづいて、それが私たちにとってどんなインプリケーションを与えてきているのかを示してみたい。

表1 ドルの対外的価値の変化（金価格の変化と1ドルの代表する金量）

第6循環（1972-1975）	純金（Finegold）	1合衆国ドル=0.2375g
第7循環（1976-1982）	純金（Finegold）	1合衆国ドル=0.1201g
第8循環（1983-1993）	純金（Finegold）	1合衆国ドル=0.0890g
第9循環（1994-2001）	純金（Finegold）	1合衆国ドル=0.2375g
第10循環（2002-2009）	純金（Finegold）	1合衆国ドル=0.0519g

図6 合衆国ドルの対外価値と国内購買力

（指数 1972=100）



原資料：London Bullion Market, Inflationdata.com より独自計算

Krüger が着目するのは、合衆国ドルの対外価値と対内価値のかい離の問題である。Krüger は、アメリカは国内市場が大きい²⁵⁾ため対外的な影響を受けにくいとしたうえで、アメリカ・ドルの対外価値と国内購買力の乖離について分析する。この分析に際して注目されているのが、金の生産状況と費用状況の変化であり、第二に、合衆国ドル為替の長期的な価値低下傾向である。この両者の関係は次のように説明される。「金で表示したドルの対外価値の変化と、ドルの国内経済の商品購買力の変化とは、価値法則と合衆国の資本蓄積と一致する」。

それでは、1970年代以降のドルの対外価値の変化、代表金量の変化、金の生産性に対する合衆国の生産性の変化が実際にどうなっているのかを見てみたい。まず、上記の表1は金市場価格の変化からみた、合衆国ドルの代表金量の変化を表している。その上で、それを指数化し、合衆国の物価変動からよみとれる購買力指数と比較したものが図6である。このうち、代表金量の変動には、景気循環中の平均値も併せて示している。なぜならば、すでに述べたように金需要には、景気循環に連動するような奢侈的な需要（富一般の対象への需要）があるからである。図6で示した二つの指標の比較からわかるように、合衆国ドルの国内購買力の下落よりも、ドル建て金価格で示されるドルの体表金量の下落のほうが大きいことが分かる。

次に、金の生産性変化と合衆国の商品生産性の変化の差を表に示してみた（表2）。この表からわかることは、全体として、1970年代以降2000年代初頭までの両指標を比較してみると、合衆

表2 金と商品の生産性変化

	生産性の変化		差 分
	金生産	合衆国・商品生産	金生産性に対する合衆国の商品生産性
第6循環	+14%	+11%	-3%
第7循環	-25%	+10%	+35%
第8循環	-17%	+6%	+23%
第9循環	+30%	+30%	0%
第10循環	+27%	+19%	-8%

国国内の生産性の上昇率の方が高いということである。

これらの検討から次の二つのことが導かれる。

* 貨幣金の価値が正確に事実上の代表金量を介して合衆国ドルに反映されているとすれば、合衆国ドルの国内購買力指数は増加するはずである。そうすると、合衆国ドルの国内購買力の傾向的低下は価値的要因以外の要因によって引き起こされているということになる。それはなにか。結局ところ、ここでもその最大の要因はドルの代表金量の低下、すなわちインフレーションの進行で説明されることになる。

* 次に、国内購買力の低下傾向とドル建て金価格の低下傾向の差は何を表しているのだろうか。この場合、考えなくてはならないのはドル建て金価格の変化傾向がどのようなファクターによって起こっているかに他ならない。つまり、国内購買力の変化傾向を規定するインフレ（代表金量の変化）以外のファクターがそこに含まれていると考えざるを得ないからである。

結論的には次のようにいうことができる。すなわち、金市場におけるドル建て金価格は世界市場から金需要によって変動する。したがって、世界市場からのドルの評価、すなわち、世界市場からのドルの信認に対する変化が、ドル建て金価格の傾向的変動に反映され、合衆国ドルの国内購買力との差を生み出したとってよいであろう。この点、Krüger は次のように述べる。

「このことは特に、合衆国の経常収支と公財政における構造的で、拡大し続けている赤字をもたらすような再生産的基底関係に関連させると有効である。金融市場危機と世界経済危機によって合衆国の対外債務と対内債務が巨大な規模に達し、そしてそれによって、2007～2008年の金融危機の頂点のときと同じように——今なおそうであるのだが——、合衆国ドルに集中された信用制度の取り引き高が通貨制度の中で押さえられないばかりではなく、それは、想定される推計によってその残高がもっと大きく評価されなければならない。なぜなら、この危機は克服されていないばかりでなく、2011年以降の公信用の拡大による危機への対処と危機の克服の余地は、その前の3年間よりもいっそう厳しく狭まっているからである。そしてこのことは言わずもがなのことである。なぜなら、ちょうどこの期間は、危機それ自体によって損失が露わになった後にずっと続いていながらも、一応制御されていた国際金融市場での擬制資本の減価を国際的な協同行動で管理することはできなかったからである。さらに、金融市場のプレーヤー達のこの「忘却」と、その誰もが取りかからない世界市場での資本蓄積過程の長期的展開の中での危機の分類は、

金価格の現在の水準で『値踏みされている』。/ドルに支配され、その発行者すなわち債務者としての合衆国アメリカが義務を負っている擬制資本の危機的で、破壊的な価値減価と、それに伴う合衆国通貨の国際的な信用の喪失とは、国際的な支払い・購買手段として、あるいは、世界貨幣の代理としてのドルの役割を広範に破壊するであろう。同様に、合衆国ドルで保有されている国々の通貨準備が影響を受け、数多くの国家が支払い不能になり、国際市場での貸し手と購買者として退出するであろう……²⁶⁾」。

ここで指摘されていることは、ドル建て金価格（一応これをここでは「対外的価値」と呼ぶ）の上昇には国際通貨制度における危機と同時にドルの危機が反映されているということである。こうして考えると、ドル建て金価格と合衆国ドルの国内購買力との差は、ドルの信認低下の裏返しであるといえる。その意味で、金市場価格を引き上げている需要は、蓄蔵貨幣としての金への需要増加要因ということができ、そのことは、金が一般的な商品でなく、貨幣金として作用し、金価格も貨幣金の論理で規定されることを示しているといえる。

結びにかえて

以上、Krügerの分析を手掛かりに金価値と金市場価格の動きや、ドル建て金市場価格の動きとドルの国内購買力の差などについてみてきた。そこで明らかにしたことは、(1)現代経済における信用貨幣の拡大こそが、「貨幣の観念化」に他ならない。だがしかし、それは金廃貨とは異なるのであり、金が現在も貨幣であることを前提に金価格、金価値を分析しなければならない。(2)金が現在も貨幣として機能しているという意味では、①金価格と金価値の変動が無関係に動いている点を確認できること。②ドル建て金市場価格変動とドルの国内購買力との変化率の差、そしてそれがあらわしているドル危機＝ドルの信認低下との相関などが確認できた。

なお、Krügerの議論についていえば、(1)金価値と金価格とを混同していると思われる面があること。(2)通貨の対外価値に国際価値の修正命題がどのように反映するのか、(3)通貨の対内価値は何によって規定されるのかという点に、さらに検討し克服しなければならない面があるといえる。しかし、これらの点はこの論文の課題の範囲を超える今後の課題である。世界市場における価値の修正命題を現代経済においてどのようにとらえ、そしてそのことを政策的議論にどのように応用するかも我々に課せられた今後のテーマであることを指摘しておきたい。

* 本論文は、石井記念証券研究振興財団研究助成金（2012年度助成：テーマ「経済不安下における資源価格と資本市場との関連性をめぐる研究」）および、学術振興会科学研究費補助金（支給年度：2012年～2014年度）、課題テーマ「多国間産業連関型生産性格差アプローチによる長期為替レート決定要因の分析手法の構築」（研究課題番号：24530300）の成果の一部である。

注

- 1) David Harvey, *A Companion to Marx's Capital*, Verso, 2010, p.70（森田成也、中村好孝訳『資

本論〉入門』作品社, 2011年, 114ページ)

- 2) 松本朗「現代における金 (Gold) の貨幣性——金生産, 金生産コスト, 金市場価格——」秋山・吉田編『ドル体制とグローバリゼーション』駿河台出版社, 2008年。
 - 3) 例えば, 楊枝嗣朗氏は, 史的研究の上で, 貨幣は歴史的に支払手段であり, 債権債務関係をしめす計算貨幣 (価値標準) 出会うか無かったとした上で, 商品貨幣の金や銀が流通していた時代にも, 金が尺度機能を果たしていたとは言えないとする。また, 富塚文太郎氏は, 不換制下で金の貨幣としての役割は否定され (金廃貨), 物価体系そのものが価値尺度としての意味を持つようになるとする。さらに, 現代通貨=紙幣説をとる前畑雪彦氏は, 金=貨幣であることを認めながら, 現代におけるその関係は観念的なものへと閉じ込められ, 金の価値尺度機能は現実にはワークしなくなる。これらの論理の整理は, 拙稿, 前掲論文, 239-241ページを参照されたい。
 - 4) 例えば, 山田喜志夫『現代貨幣論—信用創造・ドル体制・為替相場』青木書店, 1999年。村岡俊三『グローバリゼーションをマルクスの目で読み解く』新日本出版社, 2010年などを参照されたい。
 - 5) David Harvey, *op. cit.*, p. 70, (森田, 中村訳, 同上書, 114ページ)
 - 6) Krüger, *ebenda.* S. 136
 - 7) 「(国々の代表貨幣—引用者) の対外価値は, 金に対する代表貨幣の事実上の兌換可能性関係を表しており, これら貨幣の価格標準の尺度単位ごとの事実上の金含有量である」(Krüger, *ebenda.*, S. 150)。
 - 8) なお, 現在金が貨幣としてどのように需要されているかについての実証的な先行研究として以下をあげておきたい。山田喜志夫「金問題」前掲『現代貨幣論』, 同「現代における金の意義」『現代経済の分析視角——マルクス経済学のエッセンス——』(桜井書店, 2011年), 松本朗「補論 現代の金問題」『円高・円安とバブル経済の研究』(駿河台出版社, 2001年), 同「現代における金 (Gold) の貨幣性」秋山誠一・吉田真広編『ドル体制とグローバリゼーション』(駿河台出版社, 2008年)。
 - 9) Krüger, *ebenda.*, S. 137
 - 10) K. Marx, *Das Kapital I*, MEW. Bd23, SS. 159 (邦訳『資本論』第1巻 a, 新日本出版社, 1997年, 245-246ページ), Krüger, *ebenda.*, S. 137
 - 11) Krüger, *ebenda.*, S. 139
 - 12) Krüger, *ebenda.*, S. 140
 - 13) Krüger, *ebenda.*, S. 137-140. なお, Krüger は, スミスやマルクスにもよりながら, グローバルな競争にさらされている (世界市場商品) としての金の価値が最優良地で規定され, 超過利潤を生まないと主張する。例えば, マルクスは次のように述べている。「豊度のより低い貴金属鉱山および宝石鉱山の生産物が地代を生まないのは, 豊度のもっと高い鉱山がつねに市場価値を規定し, また, ますます豊度のより高い鉱山が開発されて, いつも上昇線をたどるからである。したがって, その生産物は, その価値よりも安く, 単にその費用価格で売られるにすぎないのである」(K. Marx, *MEW*, 26-2: P. 365)『剰余価値学説史』)。また, アダムスミスについては, 以下を参照されたい。A. Smith (1876), *Wealth of Nations*, (山岡訳, 『国富論』第1巻, 2007年, 日本経済新聞出版社, 178-179ページ。大内・松川訳, 岩波書店1969年, 314-315ページ)。
- マルクスの主張の理解に加えて, 鉱物資源である金の価値を優良原理で捉えようとする Krüger のこの主張には, 理論的に多くの疑問が残る。この点, 今後, さらに検討が必要となろう。
- 14) このことは, すでにフラートンによって指摘されている。Fullarton (1845), *On the Regulation of the Currencies-being an Examination of the Principles*, London (福田長三訳『通貨論』岩波文庫, 1941年)
 - 15) Krüger, *ebenda.*, S. 141. Krüger は, 金生産 (供給面) と金の需要面から金価値を考えてきた。その上で, 世界貨幣としての金の価値を考える場合の第三の側面として国際価値論の問題を取り上げる。例えば, 次のように問題を考えていく。(1)「金は世界貨幣としてあらわれる。そして, 貨幣商品金の価値規定, あるいは金という世界貨幣で表現される世界市場価格は, 国際的な応用において価値法則

が被る完全な修正を内包するのである。それゆえ同時に、金の交換価値が表面に現れる過程は、商品の世界市場価格と同じように、資本主義諸国の様々な社会的総労働の国際的比重を含んでいる」、(2)「商品の価値属性と価値量の価格という形での具体的な表現形態は、それら商品の基本的な相違を消し去る、異なった、さまざまな先進国から出てくる商品の同じ世界市場価格、つまり、世界貨幣金での同じ価格が傾向的に、諸国民の不等労働量の代わりになる。」、(3)「国民的労働の国際的な重さは、商品生産側にも、金生産側にもあるのだから、それぞれの国民的労働の生産性、強度、質という様々な条件の下において異なった国々で生産されてきた、商品の傾向的な同一価格が結果として生じるのである。」(Krüger, *ebenda.*, S. 141.)

価値法則の修正命題がどのように世界貨幣である金価値に反映されるかは、きわめて重要課題である。しかし、Krügerの展開は不十分であり、他の研究をサーベイしつつ今後さらに検討を加えることにする。

- 16) 例えば、次のような記事も参考になる。Kate Randall, "Strikes spread in South African mines", *World Socialist Web Site*, 11 September 2012, <http://www.wsws.org/en/articles/2012/09/mine-s11.html>
- 17) David Massey, "Class Struggle and Migrant Labor in South African Gold Mines", *Canadian Journal of African Studies / Revue Canadienne des Études Africaines*, Vol. 17, No. 3, 1983
- 18) Krüger, *ebenda.*, S. 142-146.
- 19) 「巨大鉱床は……終末に近づいている。その間に、新たな生産を拡大することはより困難で、高コストになってきた。低すぎる収益のものはすでに採掘を終了した」(Erste Bank Research, 2010) また、Krügerは、指摘する。「一オンスの金の『総コスト』は、——騰貴した生産費用および開発費用の結果（前掲書を参照されたい）——ロンドン金市場での1,100米ドルの金価格のところで、2009年に740米ドルに見積もられた」(Krüger, *ebenda.*, S. 145).
- 20) 山田, 前掲論文「金問題」, 松本, 前掲論文「現代における金 (Gold) の貨幣性」を参照されたい。なお、この問題に関するKrügerの論理展開は、金価格と金価値を混同している部分が散見される。そこで、実証的な部分はKrügerを参照しながら、筆者の主張を論述する。
- 21) Krüger, *ebenda.*, S. 145
- 22) 松本, 前掲論文「現代における金……後略」, 2010年
- 23) Krüger, *ebenda.*, S. 151.
- 24) Krüger, *ebenda.*, S. 154.
- 25) Krüger, *ebenda.*, S. 342.
- 26) Krüger, *ebenda.*, SS. 344-345.